

フェレットの副腎疾患

フェレットの病気の中でも多く認められるものです。進行が遅いためかなり進行した状態で来院されるケースがよく見られます。フェレットを飼われている方はこの病気について知っておいてください。

副腎は左右の腎臓の近隣に存在する小さな器官で左右一対あります。この解剖学的構造は犬猫そして人も同様です。この副腎は様々なホルモンを分泌する器官です。通常は、ホルモン分泌調節が様々な器官やホルモンでなされており、生命の維持に重要な役割を果たしています。ところが、このホルモンの分泌調整がおかしくなり、ある種のホルモンが過剰分泌したり、あるいは分泌低下などが生じると病気になってしまうのです。

概要

フェレットの副腎疾患は、犬猫や人の場合(クッシング症候群やアジソン病)とは、トラブルを起こすホルモンが違うので、同じ副腎のトラブルでも異なるものと考えて下さい。フェレットの副腎疾患はあらゆる年齢で発症が見られます(1～7才)。雌雄の差はありませんが、やや雌の方が多いようです。通常は、脱毛という症状で来院されます。しっぽやしっぽの付け根から脱毛が始まり、背中に広がっていきます。最終的には顔以外の全ての毛が抜けてしまいます。その他の症状として、雌では外陰部の腫脹、粘液の排出などが見られ、雄では前立腺の腫大、頻尿、攻撃性の増加などがみられます。最終的には雌雄ともに体重の減少、貧血、後肢の不全麻痺などが見られるようになります。

原因

この病気の原因をお話しするには副腎のホルモン分泌を理解してもらう必要がありますので、まず、その勉強です。副腎から分泌されるホルモンは、糖質コルチコイド(コルチゾル、コルチステロン)、電解質コルチコイド(アルドステロン)、アンドロジェン(男性ホルモンの総称で代表的な物はアンドロステンジロンやテストステロン)です。それぞれの作用は省略しますが、犬猫の副腎ホルモン過剰症(クッシング症候群)は糖質コルチコイドが過剰分泌し、副腎ホルモン低下症(アジソン病)は電解質コルチコイドが低下する病態です。しかし、フェレットでは、男性ホルモンであるアンドロジェンが過剰分泌するのです。この過剰分泌が生体に様々なダメージを与えるのです。

現在考えられている原因は遺伝的要因と未成熟期の避妊去勢手術です。遺伝的要因とはある種の酵素の欠如により糖質コルチコイドが作られず、アンドロジェンが増加するものです。また、未成熟期に避妊去勢手術を行うと、性腺から分泌されるホルモンによる調節機構がなくなり、結果として副腎から分泌されるアンドロジェンが増えてしまうというものです。フェレットは生後6週齢以内に避妊去勢が行われますので、この要因が大きいようです。

診断

診断は画像診断が中心になります。超音波検査により腫大した副腎を確認することで診断が付きまます。また、ある程度の大きさになれば、レントゲン検査でも確認できます。過剰分泌したホルモンの測定は感度が良くないため、現時点ではあまり利用されません。今後、良い血液検査法が出てくることを期待しましょう。

治療法

[外科手術]

この疾患の治療法は外科的な摘出が最初に選択されます。副腎は左右に一つずつありますが、片側性の場合はその副腎を摘出することで症状が改善されます。この場合、左側副腎の場合の摘出は容易ですが、右側副腎の場合は、後大静脈という太い血管に隣接しているのと肝臓の一部とも接触しているために、摘出には技術を要します。現在当院では、超音波吸引装置(キューサー)という特殊な装置を使用し、摘出を行っています。この装置は血管を損傷することなく、組織を超音波で破壊し吸引します。これにより安全で確実に右側副腎の摘出ができます。

また、両側の場合は左副腎を全部摘出し、右副腎を 50 ~ 75 % 摘出する方法をとります。両側を完全にとってしまうと内科的にホルモンを補充しても死亡するケースが多いからです。最終的には摘出した副腎を病理学的に検査するのですが、統計学的には良性が 90 % 悪性が 10 % といわれています

[内科管理]

副腎の腫大が良性か悪性かは摘出後の組織検査で判定するしかありませんから、治療の第一選択は外科的摘出です。手術が行えない場合のみ内科的に管理すると考えて下さい。麻酔に耐えられないと判断された場合、リンパ腫などを併発している場合が外科の対象外になります。また、飼い主の方が外科を希望されない場合も内科的管理をします。現在、一番有効性が認められている物は、酢酸リュープリンという注射薬です。ただし、この薬は抗癌剤で、人では前立腺癌や子宮筋腫などに使う薬ですので、重度な副作用があることと高価であることが問題点です。